

## パラオ調査報告

### パラオにおける日本語の使用状況についての調査

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

河路由佳

#### 1. 調査の概要

##### 1-1. 第一回調査

① 調査日程 2012年2月17日(金) - 23日(木)

② 調査内容

パラオにおける日本語使用についての予備調査を行った。

A. ベラウ国立博物館における「現代パラオ語の中の日本語起源の借用語、外来語」についての調査の結果について、また、日本時代を生きたパラオの人々のライフストーリーに関する同博物館の展示等について、意見交換、情報交換を行った。

インタビュー対象者：館長 Olimpia 氏

メディアディレクター Simeon 氏

B. カトリック教会(旧「スペイン教会」)及びシニア・シティズン・センターにおいて日本時代に生を受けたお年寄りにお話をうかがった。日本語を話す人は少数であった。

インタビュー対象者：アントニナ・アントニオさん(1930年生)

Ngesengeas T. Nakamura(トシコ)さん(1934年生)

マクシーさん(1938年生)

パウリーナさん(1942年生)

ミリヤムさん(1941年生)

C. 日本国大使館を訪問、専門員の林直子氏よりパラオでの日本語にかかわる活動についてうかがった。日本語補習校のこどもたちによる「パラオの中の日本」と題された展示を見た。ちょうど滞在中に、大使館主催の日本映画上映会(「のど自慢」)があったので、パラオのお年寄りと一緒に参加した。

D. 中島敦の短編「マリヤン」のモデルで日本語に大変堪能であったマリヤ・ギボンズについて調査をし、関係者に話をうかがった。

インタビュー対象者：マリヤの長男 現大酋長(イブドゥル)ユタカ氏(1944生)

マリヤの娘 現女大曾長（ビルーン） グローリア氏（1950年生）

なお、Dに関連して、帰国後、関係者へのインタビューを続行した。

戦争中、パラオ教会で牧師をしていた山本精一氏と戦後同じく牧師をしていた渡部義和氏へのインタビューである。両者ともパラオでマリアと親交があった。

### ③ 収集資料

Aについては以下の調査報告書をいただいた。

\* 「パラワン日本語集（JAPALAU）」編集者：古賀信二 JICA シニアボランティア  
881語（2008年8月20日）

\* 「loaned Jap's words」698語

B、DのインタビューはICレコーダーで録音、話題にのぼった日本語の歌の歌詞カードなどは写真で記録した。Cの展示も写真撮影した。お年寄りの間で蓄積されている日本語の歌詞ノート、メモなどをみせてもらい、写真におさめ、複数の愛唱歌を録音して持ち帰った。Dについては、博物館やグローリア氏のご自宅において、マリアの写真を撮影した。また、帰国後、マリアの留学先であった三育学院の図書館にてマリアの留学に関する資料を閲覧し情報を収集した。

④ 成果発表 2012年3月21日（水）報告会にて第一回調査について口頭発表の予定であったが病気のため報告書のみ届けた。

## 1-2. 第二回調査

① 調査日程 2012年7月27日（金）—8月4日（土）

### ② 調査内容

パラオにおける日本語使用者への聞き取り調査を行った。日本語の習得過程や使用状況等を中心に聞いた。

E. 日本統治時代に日本語で学校教育を受けたパラオの人への聞き取り調査。

主としてその日本語学習と戦後から現在に至る日本語使用についてうかがった。

ルムセイ（Remusei Tabelual）さん（1925年生、女性）

（中島敦「マリヤン」のモデル、マリヤの義姉の娘）

ヤチヨさん（1930年生、女性。日本時代の初等教育を受けた）

アントニナ・アントニオさん（1935年生、女性。同上）

岸川格さん（1935年生。男性。母はパラオ人、父は日本人。）

F. Eと同世代のパラオ在住の日本人への聞き取り調査。

岸川浩子さん（1937年生。上記、岸川格さんの妻で、広島出身。戦後パラオに渡

った。)

#### G. 戦後生まれのパラオ人日本語話者への聞き取り調査。

ドナルド・ハルオさん (1960 年生。男性。パラオのホテル経営者。日本留学経験あり)

ストム (Stomu Emesiochel) さん (1961 年生。男性。ダイビングのガイド)

ケルビン (Kelvin Rengechel) さん (1962 年生。男性。観光ガイド)

カイボ (Kaipo rechdungel) さん (1982 年生。男性。日本留学経験者。パラオ政府に勤務。)

サビーナ・アンドリューさん (1963 年生。女性。パラオ高校のツーリズムの教師)

#### H. パラオにおける日本語指導者への聞き取り調査。

\* 2001 年にマリステラ小学校の校舎を借りて開校した「パラオ日本語補習学校」

久米信行さん：同校の運営委員長 (日本人会)、

フジ カツオさん：同校校長

梅本雅枝さん・追立秋子さん・一戸千香さん：同校の常勤教員

\* パラオ高校 (PHS)

野上陽子さん：日本語教員

\* パラオ・コミュニティー・カレッジ (PCC)

河村礼子さん：日本語教員

それぞれ校舎を見学、日本語の授業の内容や生徒の様子などをうかがった。

### ③ 収集資料

以上のうち 1, 2, 3 についてはビデオによる録画・録音データがある。特に太字の方々の録音文はすべて文字起こしを行った。4 については、ご本人たちからの希望で、録音・録画は行わなかった。

④ 成果発表 2013 年 1 月 24 日 (水) 報告会にて第二回調査について口頭発表を行った。

## 2. 調査によってわかったこと

調査 A では、パラオ語になっている日本語起源のことばに関する調査報告「パラワン日本語集 (JAPALAU)」 「loaned Jap's words」を見ながら、戦後世代の館長らに、現在のパラオにおける日本語使用について聞いた。日本時代に教育を受けた世代は現在では 80 代以上で数が減少している。彼らは戦後も日本語を話していたが、その後の世代では、日本

語を話せる人は少ない。しかしパラオ語の中に相当数の日本語起源の語が定着しているということであった。ただし、もとは日本語とは語形も意味も変わっているものが少なくない。例えば「スコーシオ」は「AIR PORT」を意味するが、それは日本語の「飛行場」から来たという。飛行機を「スコーキ」という。貿易船を「やさいぶね」と言ったりもする。

現在のパラオではパラオ語が話されるが、教育言語は主として英語で、パラオ語の聖書はあるが、他は子どもたちの学校の教科書類は全部英語である。そのため、若い世代では、パラオ語の中の日本語起源の語が、英語起源の語に置き換わる現象も見られるということである。例えば、親が日本語を使っていたオリンピアさんらがパラオ語の中で「トクベツ（特別）」という語を使うところ、子どもの世代は「SPECIAL」で代替するそうである。

続くB、Dのインタビューでその状況が具体的にわかった。高齢者施設であるシニア・シティズン・センターで作業をしている人々の中でも、日本語を話す人は少数であった。マクシーさん（1938年生）、パウリーナさん（1942年生）、ミリヤムさん（1941年生）は、日本時代に学校には通っていない。日本語は話さないし、聞いてもわからないと（英語で）話したが、「（日本語使用は）冗談だけ」だと言い、「元気ですか」「元気です」、「それでいい」「大丈夫」「しょうがない」などがそれであるということで、その場にした多くの人がこれらの語を理解した。また、日本語の歌をよく歌う。ミリヤムさんは、戦後の小学校で（「マリヤン」のモデルで日本語に堪能な）マリヤに習った。マリヤは日本のカチカチ山のお芝居を（パラオ語に翻訳して）教え、「花嫁人形」は（日本語で）ふりをつけて歌うことを教えたということで、後者を日本語で実演してくれた。

日本語の話せる人は Ngesengeas T. Nakamura（トシコ）さん（1934年生）だが、同世代の他の人は日本語を話さないという。彼女が話せる理由は、1958年沖縄出身の男性と結婚したからだと言われた。出会ったころは日本語は忘れていて話すことはできなかったが、夫の親族との共通語として日本語を使う必要が生じ、子どもの頃の日本語を思い出し、次第に使えるようになったということであった。

アントニナ・アントニオさん（1930年生）は、自由に日本語を話す。日本の公学校で3年、補習科2年教育を受けた最後の卒業生だという。アメリカ時代になって日本語を使う機会はなくなったが、習った日本語を忘れまいと日本語の歌の歌詞を何度も書き写し、歌い続けた。近年日本人が来るようになり、日本語を話す機会が増え、話す力を取り戻したということである。公学校のときの教科書を何度も読み、ふりがなつきの日本語の聖書を読んだり、ラジオを聞いたりもして忘れない努力を重ねている。そのように努力するのは、日本時代に受けた人間教育を忘れないようにと思うからだと言われた。

数年前のNHK放送や先行調査の状況からさらに世代が移り、お年寄りの間で日本語が共通語として使われているという状況はもうない。日本語を話す人は存在するが、それはそれぞれの事情で日本語を維持したり、新たに学んだりした努力の結果であった。

Dは、日本語に極めて堪能であったマリアの子どもにあたる方々で、コロールの大酋長と女酋長あるが、いずれも日本語は話さない。母のマリアが日本語を自由に使っていた様子が（英語で）語られた。縁者であるルムセイさんとマリアの留学先は当時杉並区にあった三育女学校で、SDA教会の世話によるものであることがわかった。マリアは女酋長になるべき人物でパラオでマリアを知らない人はいないという人物であったこともわかった。その後、日本でSDA教会の日本人牧師への聞き取りも行ったが、日本時代のパラオでの日本人の活動の中で、現在もパラオに大きな影響を与えているものの一つにSDA教会があることが確認できた。南洋庁では斡旋していなかったが、SDA教会はほかにも複数のパラオ人を日本に留学させている。中島敦の短編「マリヤン」に描かれたマリヤン（マリア）とモデルのマリア・ギボンの差異が明らかになり、中島敦の作品化の過程への示唆も得られた。

調査Cは日本大使館でパラオにおける日本語補習校の様子や日本語・日本文化普及の取り組みなどを聞いた。補習校の児童による「パラオの中の日本」という展示は学年を超えて共通テーマに挑んだ意欲的な試みで、その指導者を含む日本語補習校の関係者へのインタビューは第二回調査の調査Hで実現した。パラオ日本語補習校、パラオ高校、パラオ・コミュニティー・カレッジ（PCC）の三機関の日本語教師等関係者に話を聞いたが、パラオにおける日本語教育機関は、これがすべてであるということであった。PCCでは一般成人向けの日本語教室を行っているとの情報を得ていたが、確認したところ、教員不足が主たる原因で閉鎖したようだということであった。パラオの成人がパラオ日本語補習校に入学を希望してくることがあるが断っているということ、学びたい人はいるが学べる場が不足しているという認識が共通して語られた。ダイビングや釣りなどを目的に来る日本人観光客が多く、彼らを対象にした観光業やガイドの仕事などに日本語が使われること、日本語の歌などへの関心などが、日本語を学びたいということの背景にあるようである。調査Gのカイポさんは、将来パラオに日本語学校を開きたいと語った。

ただ、パラオで働きたいと言う日本人は多く、観光業で日本語を使う主たる業務には日本人がついてしまうため、パラオ人の参入が難しいという事情もあるようである。

現在、パラオ補習校に通う子どもたちは、駐在員の子どものように日本への帰国を前提とする子どもは少数で、多くは定住児童。両親の国籍の組み合わせは次の3通りであるという。

- ①父が日本人・母はフィリピン人、
- ②父も母も日本人
- ④母が日本人・父はパラオ人

日本の学校と同じ進度で教科書を学ぶというのは現実的ではなく、パラオと日本の関係を自覚するような活動を交え、発表会やお祭りなど行事を目標に活動している。

調査Eの日本時代に生を受けた人々へのインタビューでは、1925年、1930年、1935年、

と生年によって、戦争の影響を受けた年齢が異なることから、日本時代の思い出やその後の日本語使用にも大きな違いがある。パラオが戦地になる前は、平和で美しい町であったと語られた。1925年生まれのルムセイさんは、教会の牧師のすすめで、1941年に日本の三育女学校に留学し、ピアノや聖書を含む教育を受けた。終戦を日本で迎え、パラオにやると戻ったら、コロールの町が空襲で焼け、何もなくなっていて、勉強してきた日本語も使えなくなっていた。が、今でも日本語で聖書を読み、讃美歌を歌っている。同世代の人とは日本語で話していた。1930年生まれのヤチヨさんは、日本時代の小学校が楽しかったと笑顔で語った。先生が親切で、手工芸も教えてくれ、習ったことはその後いろいろ役立ったという。放課後はコロールの町で日本語でドーナツやアイスクャンデーを買って食べたりもしたのが懐かしいとのことであった。1935年生まれのアントニナさんは予備調査でも協力を得たが、今回は新たに「ボーイ制度」についての思い出を語ってくれた。パラオ・コロールには日本人が多く、パラオの子どもたちにとって日本語は第二言語であった。その環境を生かして、放課後、日本人家庭にいて手伝いながら日本語を使って学ぶという制度である。やがて、パラオに空襲がくるようになり、森の中に避難して過ごした。それでも、日本の学校で勉強したことは一生の財産として大切にし、教科書を繰り返し読んだり、日本語の歌を何度も書きうつしたりして日本語の独学を続け、今でも日本語を上手に話す。この世代には、日本語を忘れていた人も珍しくないという。日本統治の影響による日本語話者の高齢化は進み、その数は減少している。

岸川格氏は、母はパラオ人、父は日本人で、日本人社会に住んでいたので子どもの頃から日本語しか話さなかった。8歳までパラオで過ごしたが、終戦後、母親と兄弟をパラオに残し父親が佐賀に引き上げるのに伴って日本に行き、25歳まで日本で生活した。佐賀の小学校の5年生に編入、中学校、高校を経て、卒業後はダイビングなどを学び、25歳の時、パラオ帰国を決意した。帰国後、資金を貯め、ホテル経営を始めた。フランスから来た水中考古学者のジャック・グストという人物と一緒に海に潜り、パラオの海の保護を勧められたことからダイビングを仕事にするようになり「伝説のダイバー」として知られている。

調査Fの浩子さんは、1965年、20代後半でパラオに渡った。現代ではパラオで暮らす日本人が少なくないが、当時は珍しかった。が、日本時代によい印象をもつ人が多く、大切にしてもらえたという。ダイバーの格さんと出会い、パラオでの定住を決めて結婚した。1968年から食堂「カープ」を経営。日本人客も多いので、店では日本語を使うし、格さんと話すのも日本語である。日本語の文芸雑誌を読むのを趣味としていると語られた。

調査Gは、戦後の世代で、日本語を使って仕事をしているパラオ人の方々である。日本時代の教育とは別にそれぞれ何らかの形で日本語を学び、現在仕事に使っている。この中で、日本語の（漢字を使った）読み書きができると答えたのは、国費留学生として日本で教育を受けた1982年生まれのカイポさんのみであった。

カイポさんは日本の文化外国語専門学校の日本語1年コースで学んだが、その教え方がすばらしかったと言い、将来はパラオで日本語学校を開きたいと夢を語った。パラオ政府

での現在の仕事で日本語を使う機会はないが、日本語の上手なパラオ人として知られているので、日本のテレビ局などが取材にくると通訳を頼まれることがある。

かつて日本語の読み書きを習得したが、今はもっぱら日本語は会話に使い、読み書きには英語を使う方が多いというのはハルオさんで、「ハルオ」は、父の名前を姓としたものという。客の8割が日本人であるホテルの経営者で、日本語によるサービスに力を入れている。ペリリューの大酋長の家に生まれた。母の父が日本人（日本時代にパラオにいた）。母の兄が戦争中に日本に疎開していた。この叔父が戦後初めてパラオに来て、出会ったのをきっかけに12歳で、この叔父を頼って日本に行った。山梨県の小学校6年生に編入され日本語を学んだ。その後甲府の中学校、山梨の農林高等学校に進み、日本の造園技術を学んだ。山梨大学に進学したかったが、そのとき、ペリリューの大酋長が亡くなり次の大酋長に選ばれたため、進学を断念して19歳でパラオにもどった。

ストムさんは、日本の「ツトム」にあたるが、パラオ語には「ツ」の音がないので「ストム」という。日本人の親戚はいない。ダイビングのガイドで、日本語は客から習った。客に親しい人がいて、その人の家を何度か訪ねている。日本に行くとサービスの様子を見学して日本語を学びとっている。妻はパラオで出会った日本人。仕事では日本人客を相手にすることが多いので日本語を使うが、読み書きの必要はないので、読み書きはしない。

ケルビンさんは、農業研修生として日本で学んだ経験があるが、その研修のみで、日本語を正式に習ったことはなく、読み書きはできない。日本語が少しできるというので、日本から戦没者の慰霊団体がきたときに案内役をつとめて以来、ガイドをするようになった。本職は市役所勤務であるが、日本語のできるガイドとして知られている。

サビーナさんは、日本で暮らした経験があり、パラオ高校で観光について教えている。日本語ができるので、ときどき頼まれてガイドもするが、やはり読み書きはあまりできないし、必要だとも思わない。

パラオで日本語を使って仕事をしている人たちに共通した傾向として、仕事ではもっぱら会話力が大事で、日本語によるサービスの力を向上させたいと努力をしているが、読み書きについては必要を感じず、日本についての情報も英語によって得ている、というあり方が確認された。